

令和元年6月11日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370011

研究課題名(和文)スピノザ初期哲学における真理と認識の意義の研究

研究課題名(英文) A Study of the Significance of the Truth and Knowledge in the Early Philosophy of Spinoza

研究代表者

佐藤 一郎 (SATO, Ichiro)

山梨大学・大学院総合研究部・特任教授

研究者番号：80178706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：スピノザの初期哲学を構成する「知性改善論」と「神、人間とそのさいわいについての短論文」の翻訳、注解、解題を完成させ、出版した。解題では、スピノザのユダヤ教会破門以後の伝記上の「闇の時期」に光を当て、研究史を総括しつつ、未完で遺された「知性改善論」と未刊行の写本が発見された「短論文」の著述の事情と前後関係を歴史的に考察した。

これらから、(1)「短論文」の認識論の特性、(2)「短論文」、初期の書簡と「エチカ」の執筆開始との関係、(3)スピノザ晩年の文通相手としてその遺稿の行く末にも関与したチルンハウスに関する実証的研究、が次の研究課題として見定められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

原典遺稿集の校合による「知性改善論」の翻訳、原典写本を参照した「短論文」の翻訳、および精緻な注解と歴史的な考察によって、近年ヨーロッパの第一線の学者たちが進めてきたスピノザ初期著作の研究水準に達しえたことに学術的意義がある。近世初期におけるラテン語から自国語(オランダ語)への哲學術語移入の様相に目を向けたことも意義をもつ。

西洋哲学を受けとめる日本語を練り直し、創出するという意図を籠めて、両作品の半世紀以上ぶりの新訳を世に問うたことに社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)： I published a Japanese translation, including notes and introduction, of Tractatus de intellectus emendatione [TIE] and Korte Verhandeling van God, de Mensch en deszelvs Welstand [KV], which constitute together the early philosophy of Spinoza. Throwing light, in its introduction, on an "obscure period" in the life of Spinoza after his excommunication from the synagogue in Amsterdam, and also summarizing past studies, I made an inquiry into the histories of writing and the chronological order of these works: TIE which was left unfinished and KV which was discovered as secondary manuscript copies much later after the death of the philosopher.

From these researches I could find three problems to be investigated from now on: (1) the property of the epistemology of KV, (2) the relation among KV, the early correspondence and the beginning of writing Ethics, (3) a historical study of E. W. von Tschirnhaus who was also concerned with the destiny of unpublished writings of Spinoza.

研究分野：哲学

キーワード：スピノザ 知性改善論 短論文 翻訳 注解 認識の受動性 オランダ語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

スピノザの死後二百年近くを経た十九世紀半ば過ぎに(間接的に作成されたとみられる)オランダ語写本が発見された「短論文」は、成立事情を解明するための歴史的研究とテキスト校定を中心課題とする文献学的研究の点で難問を負う作品である。「短論文」は「エチカ」の原型をなす著作だが、発見当初からスピノザの最初期の著作とみなされてきた。他方、未完のまま「遺稿集」に収められた「知性改善論」は「エチカ」に先立って書かれ、その前提をなす方法的な著作という扱いを受けてきたが、未完の理由が解明されているわけではない。フィリップ・ミニニは、通説とは逆に、「知性改善論」を最初期の作品、「短論文」をそのあとに書かれ「エチカ」に続いていく作品とする新説を1970年代の終りから提起し、その結果従来受け容れられてきた作品順序は白紙に戻されている。スピノザは1656年にユダヤ教会から破門を受けた。それから、現在残っている最初の往復書簡の日付である1661年8月までは記録がなく、伝記上「闇の時期」になっている。スピノザの初期哲学の意義を明らかにするためには、作品順序に関するみずからの立場を固めることが課せられ、それには「闇の時期」の解明も課題になる。

2. 研究の目的

- (1) 「短論文」について、研究史の全体的把握と諸解釈の批判的整理を下敷きにした日本語訳と注解の完成をめざし、その哲学の内容としては、「エチカ」では痕跡がなくなった「認識=受動」説の意義の吟味を課題とした。
- (2) 「知性改善論」について日本語訳と注解の完成をめざすとともに、真理探究の方法という点から、中断による未完成の理由を解明しようとした。
- (3) 伝記上の「闇の時期」に歴史的な考察によって迫り、「知性改善論」と「短論文」の執筆順序に関する仮説の構築と、これら二著作の認識論の特性の解明をめざした。

3. 研究の方法

目的の(1)(2)(3)に対応して、

- (1) 「短論文」に関して、原典である手稿Aとそれを基に作成したと考えられる手稿B(ともにハーグ王立図書館所蔵)を参照しながら、現在最も信頼に足るミニニ版を中心にテキスト諸版の校合、諸国語訳、従来の注釈・解釈の検討を踏まえて、日本語訳を行い、詳細な注解を作成した。
 - (2) 「知性改善論」に関して、原典である『遺稿集』(OP)とオランダ語版『遺稿集』(NS)、ミニニ版、ゲープハルト版等のテキスト諸版を校合しながら、テキストを分析的に解読し、日本語訳と詳細な注解を作成した。
 - (3) ユダヤ教会破門後のスピノザのラテン語修養を歴史的に考察し、さらに問題の二著作の順序決定のために決定的に重要である(日付を欠く)書簡6の時期を吟味することによって、「闇の時期」に光を当て、執筆順序の仮説を立てた。
- (1)(2)(3)のすべてに互い、文献学的、歴史的研究をリードしてきたイタリア、オランダの学者と意見を交換しながら、国際的な研究水準に達することにつとめた。

4. 研究成果

- (1) スピノザの初期哲学を構成する「知性改善論」と「短論文」について、校訂版テキストだけでなく、それぞれの原典(前者については二つの『遺稿集』、後者については手稿A)も拠り所としながら、日本語訳を完成した。
 - (2) たんに原語から移し替えるのではない翻訳は、テキストへの文献学的アプローチと意味の精確な把握と連結するから、そのために必要とされる注解を余すところなく施した。他方、両作品の執筆された時期とスピノザが置かれていた状況の把握のために歴史的考察も行い、それは解題として完成された。注解と解題は、「短論文」が発見された十九世紀半ばとほぼ時を同じくして始まり積み重ねられてきた学問的なスピノザ研究と、近年特に大きく展開したその初期哲学研究を批判的に包括している。その意味で国際的な研究水準に並ぶものと考えられる。
 - (3) 両作品の半世紀以上ぶりの日本語新訳ということにとどまらず、詳細をきわめた注解と解題とを合わせて、スピノザの専門研究者、哲学研究者のみならず、一般の読者をも想定した形での出版を実現した。従来慣用されてきた翻訳術語に捉われることなく、西洋哲学の作品を受けとめて担うことのできる日本語を創出することを臆せず遂行した。
 - (4) 日本ではこれまで(地理的な不利や伝統の欠如により)十分にフォローされて来なかった文献学的・歴史的なスピノザ研究の国際的な研究水準を示すことができた。
 - (5) F.ミニニの新説が提起されるまで通説とされてきた、「短論文」を「知性改善論」に先立つ最初期の著述とみなすクロノロジーの説の一つの根拠とされた、「短論文」に特徴的な「認識=受動」説を根柢から検討し、その意義を考察する論文の執筆準備にかかっている。
- 主要な研究成果とは別に、付随して課題となった研究およびその成果として、以下の(6)~(8)を挙げられる。
- (6) 「知性改善論」の原典『遺稿集』(ラテン語)とオランダ語版『遺稿集』を校合し、また「短論文」のオランダ語原典(本来ラテン語だった著述からの翻訳という説が一応の定説)を研究する過程で、共通語のラテン語だった哲学術語が近世になって各国語(この場合はオランダ語)

に移されて形成された際の対応を考察することになった。そのために十六世紀以降に刊行された古辞典、語彙集を探索した。これも日本国内はもちろん、ヨーロッパでもF.ミニーニ以外には手を着けていない研究である。

(7) 「短論文」の幾何学に範を採った「付録」は、今日伝わる最初期のオルデンバーグとの書簡の内容、および「エチカ」冒頭部との関連を考えさせる。その対応関係は慎重な検討を要するが、ともかく「エチカ」執筆開始の時期とその生成過程を解明する重要な手懸りとなることが今後の研究の課題として浮かび上がった。

(8) 未完の「知性改善論」が『遺稿集』に収められて初めて印刷されたことに関する歴史的考察は、『遺稿集』全体の編集作業と印刷の経緯に目を向けさせることになった。そこから、スピノザ晩年の（「エチカ」の重要な問題点に鋭い質問を投げかけた）文通相手 E.W.v.チルンハウスがスピノザの遺稿刊行までに関与した役割にも着目するに到った。チルンハウスは片方ではライプニッツとも情報を交換し合っていたので、二人の大哲学者を媒介したチルンハウスの人と思想を明らかにすることが今後の探究課題となった。スピノザの著作をチルンハウスのために筆写したファン・ヘントという人物も従来言及されることがあまりなかった。その手に成った「エチカ」の写本は（スピノザの元の文通相手でその後カトリックに改宗した）ニールス・ステンセンの手に渡ってからローマの検邪聖省に持ち込まれており、近年ヴァチカン図書館においてそれが発見された。P.ステーンバックがこのヴァチカン写本も参照しながら『遺稿集』のテキストを校合した「エチカ」が近く刊行される。チルンハウスとファン・ヘントをめぐる歴史的研究、『遺稿集』のテキスト生成史についてはステーンバックが先駆けているが、それを十分に吸収した上で、「エチカ」のテキストの文献学的研究を行うことが今後取り組むべき課題になる。またそれはチルンハウスが「エチカ」の重要な問題点を取り上げて発した疑問の哲学上の意義を見きわめ、チルンハウスを介してスピノザとライプニッツが関わる思想圏を視野に収めることにつながるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

スピノザ、佐藤 一郎、みすず書房、知性改善論/神、人間とそのさいわいについての短論文、2018、586

(内容)

「知性改善論」翻訳、1-64

「短論文」翻訳、65-271

(「短論文」)「概略」翻訳、273-287

訳注、289-465

解題、467-552

あとがき、554-559

略語表・文献、i-xiv

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：ミニーニ、フィリッポ

ローマ字氏名：(MIGNINI, Filippo)

研究協力者氏名：プロイエッティ、オメーロ

ローマ字氏名：(PROIETTI, Omero)

研究協力者氏名：ステーンバック、ピート

ローマ字氏名 : (STEENBAKKERS, Piet)
研究協力者氏名 : モロー、ピエール-フランソワ
ローマ字氏名 : (MOREAU, Pierre-François)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。